

時はまたとない愉快な時間となったのである。

しかし3年連用も5年連用も、最初の1年目を書く時だけは、過去の記事が並記されていないので、きわめて味気ない。そこで昨年から新工夫をこらしてみた。ルーズリーフ1頁を5分割して、5年連用の日記を作った。6年目には1枚ごとに新しいルーズリーフを挿入し、左右の頁を同一の日にすれば、これで10年間は、過去の記録を見ながら、日記を楽しめるわけである。そして11年目には、最初の5年分の頁をはずして、新しいのを挿入すれば、いつでも5年ないし9年の過去を楽しめる訳である。この永久に連続する連用日記は、今年第2年目ではあるが、はたしていつまで続くことやら。

広 い 視 野 で

大和田 順 子

数年前、四国の祖谷地方に行った時のことです。祖谷地方は平家の落人の村として、山奥にひっそりと陰れて数百年来生活していた村です。当時は、土讃線池田からバスで約3時間ぐらいかかりました。現在は、経済構造の変化から過疎の村となっていることでしょう。私が訪れた時も、「若い人達が大阪などの大都会に出てしまって、村には老人ばかり残っている」と役場の人が嘆いていましたから。

さて、この村で数日過しました折に、私は村人からも、役場の人達からも、そして宿のお内儀^{かみ}からも、「この祖谷村の人達は性質が醇朴で勤勉、しかも相互扶助の精神がさかんである。たとえば村人の中に病人が出ると、畑仕事や家事の手伝いなどをして援けるし、また生活に困る者が出ると村全体で面倒をみる。まことに良い村ですよ。」と誇らかに語るのを聞かされた。私もその時は、きびしい自然を相手にして数百年の間山奥の生活を続けて来たのだから、確かにそうだろうと思った。しかし、これは必ずしもそうではないという事が知らされたのです。

それは祖谷村からの帰り途のことです。当時祖谷と池田の間は、バスが一日3往復しかしていなかったもので、いずれのバスも超満員の盛況でした。勿論私の乗ったバスも物凄く混んでいてやっと立っているような状態でした。乗客の中に東京から来た学生達のグループがいました。その中の一人がバスに酔って大分気分が悪いようでした。そのうちに彼は我慢しきれなくなってしゃがんでしまいました。けれども、誰も彼に席を譲ろうとはしません。座席を占めているのは殆んど祖谷の人

々です。親切で同情心が厚いはずの人達です。しかし彼等は、傍で冷汗を流して苦しんでいる病人を見ても無関心をよそおい、自分達だけのおしゃべりに夢中になっていました。やがて停留所につき、バスを下りる人がいたので座席が二つほど空きました。するとどうでしょう。その座席に病人をやすませずに、自分達の仲間である祖谷の人をかけさせようとしたのです。あまりの自己中心のエゴイズムに、私もすっかり義憤を感じ、教師根性をまる出しにして思わず「病人をかけさせなさい。」と怒鳴ってしまいました。自分で自分の出した大声に驚くぐらいに。

確かに祖谷の人々は親切で、お互いに助け合っているのでしょう。けれど、この仲間を一步出れば、もう縁なき衆生なのです。他人がどんなに苦しもうが嘆こうが、一切おかまいません。この様な仲間意識が外に向っては排他主義となり、内に向っては村八分の現象などとなるでしょう。そして、これはともすれば人間の陥りがちな弊害なのです。この時に私は聖書の中にある「善きサマリヤ人」の話思い出しました。2千年前の昔、狭い仲間意識に凝り固まっていたユダヤ人を叱られて、博愛を説かれたイエスの言葉の偉大さをしみじみ考えました。

さて、地理を専攻される皆さん達は、狭い地域や仲間意識を超えて、広い視野で物事を眺めることが出来るのです。またそれが地理的なものの見方だと思います。狭い仲間意識は人々の心に垣根をつくり、誤解を生じ易いのです。そして、時には争いや戦争にまで発展する要素を含んでいます。だから地理学を専攻される皆さんは、その意味で素晴らしい学問を選ばれたこととなります。また一方その様な学問を専攻する者の責任として、人間社会の狭いこの様な弊害に陥ることなく、広い視野で物事を観察し判断して、社会のためそれぞれの分野で活躍される必要があると思います。

歴 史

竹 内 啓 一

お茶大に講義に来るようになって、これで3年目、したがってこの原稿を編集子に求められるのも3回目、2度あることは3度とかいって横着をきめこむほどの心臓もないので今回は筆をとった次第。となれば、やはり言い訳からはじめなければいけない。

第1回目ときは、まったくの日和見、乃至は怖気づいたため。地理学の勉強をするのに女性ばかり集まる理由がどうしてもわからず、したがってそれだけでもお茶大地理学科という存在は不可解で不気味なのに、何か随筆みたいなものを書けといってきた。随筆などというものは、おつにす